トンボの小太郎

作：ゴスペルテックス

絵：YomiX 様

山岸忠恕様

Yoko 様

MUKURI 様

フッキー様

はじめに

　このゴスペルブック(冊子)は、トンボの小太郎プロジェクトにご応募・ご協力くださった、下記の複数の方のイラストを使用しています。ご応募・ご協力くださったみなさん、ありがとうございました。

表紙 山岸忠恕様		
P2 YomiX 様	P4 YomiX 様	P6 山岸忠恕様
P8 山岸忠恕様	P11 山岸忠恕様	P13 山岸忠恕様
P14 山岸忠恕様	P15 フッキー様	P16 山岸忠恕様
P19 山岸忠恕様	P21 山岸忠恕様	P23 山岸忠恕様
P25 山岸忠恕様	P27 山岸忠恕様	P28 山岸忠恕様
P30 MUKURI 様、山岸忠恕様		P31 山岸忠恕様
P32 YomiX 様	P33 山岸忠恕様	P34 山岸忠恕様
P36 Yoko 様	P39 YomiX 様	P40 フッキー様
P42 YomiX 様	P43 山岸忠恕様	P45 山岸忠恕様
P47 山岸忠恕様	P49 Yoko 様	P50 MUKURI 様
P51 山岸忠恕様		

1. なまえ

　みなさん、こんにちは。僕はトンボの小太郎です。僕は最初、自分の名前があまり好きではありませんでした。それで、ある日ご飯を食べながら、思い切って聞いてみたんです。

「お父さん、どうして僕の名前は小太郎なの？」
「お前が生まれた時、お父さんとお母さんはうれしくて、うれしくて、どんな名前にしようかなぁって夜も寝ないで考えたんだぞぉ。」
　夜も寝ないで考えたって言ってるけど、僕のお父さんのことだから、夜はグーグー寝ていたに違いありません。

「お父さんの名前が太郎で、その子どもだから小太郎って付けたんじゃないの？」
　でも僕は、お父さんとお母さんが、僕が生まれてうれしくて、うれしくて、一生懸命僕の名前を考えてくれたことを知って、とってもうれしくなりました。

　すると、お母さんがゴックンと、急いでご飯を飲み込んで言いました。
「あら、違うわよ！お父さんの『太郎』とお母さんの『小町』の『小』をつけて『小太郎』になったのよ。」
　それを聞いてから僕は、自分の名前が大好きになりました。大好きなお父さんとお母さんが、いつも一緒にいてくれているような気がするからです。

　みなさんの名前は何ですか？ どうしてその名前が付けられたのかを、お父さんやお母さんに聞いたことはありますか？ 聞いたことがない人は、ぜひ聞いてみてください。

2. 一枚だけ短い羽

みなさん、トンボの羽は何枚あるか知っていますか？　左に2枚、右に2枚、合計4枚の羽が背中についています。

でも、僕は生まれた時から左後ろの羽が１枚だけ短いので、空を飛ぶ時はちょっとバランスが崩れて、あまり上手に飛べません。

友達にからかわれたり、バカにされたり、悪口を言われたりすると、すごく悲しくなります。悪口を言われたらどんなに悲しいか分かっているので、僕は他の人の悪口は絶対言わないことに決めました。

3. あぶないやつ

　ご飯を食べている時も、お父さんは僕のことを心配してくれます。

「小太郎、家の外に出たら危険がいっぱいだから、気をつけなきゃいけないぞ。」

「そんたごどぉ、わがってらぁ。」(そんなこと、分かってるよ という秋田弁)

「おお、小太郎、おまえ秋田弁しゃべれるようになったながぁ。」

秋田県生まれのお父さんが、この間おばあちゃんと久しぶりに会った時、使っていた言葉がおもしろかったので、僕は真似をしてみました。

「ねえ、ねえ、お父さんはたまに秋田弁を使うけど、どうしてお母さんと話す時は標準語なの？」

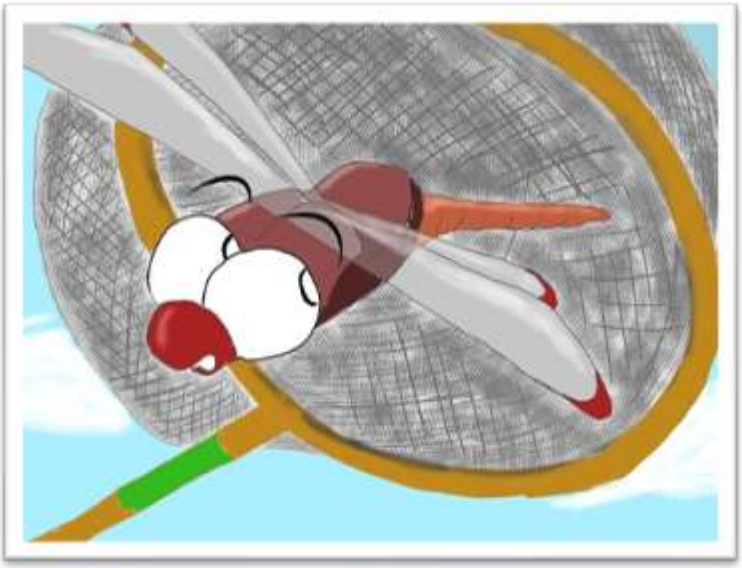
「お父さんとお母さんは東京で出会って結婚したから、普段は標準語で話すんだけど、お母さんは兵庫県生まれだから、時々関西弁がポロっと出るんだ。知らんけど・・・。」

「あはは。」

「とにかく、外は危険がいっぱいだから気を付けるんだぞ。網のついた長い棒と、虫取りかごをもって近づいてくるやつ。そして特に、指をぐるぐる回しながら近づいてくるやつには、要注意だ。そいつらは、お父さんたちトンボを捕まえる気満々だから、気を付けるんだよ。」

「男は外に出れば 7人の敵、家に帰れば 8人目の敵が待ち構えているんでしょ。」

「なんじゃそりゃ。」



4. みんなちがう・みんなたいせつ。

「さぁ小太郎、お父さんと散歩に出かけよう。今日も空を飛ぶ練習だ。楽しいぞぉ。」
お父さんは、クルっと一回転、得意の宙返りをしながら誘ってくれました。
「うん、今日はどこへ行くの？」
「秘密・・・良い所を見つけたんだ。」

　僕はお父さんの後をくっついて、一生懸命飛びました。お父さんは飛ぶのが得意でない僕のために、少しゆっくり飛んでくれました。でも、今日はいつもの散歩より、長い間飛んでいるような気がします。

「お父さん、僕疲れたよ、少し休憩しようよ。」
「そうだな、ほらあそこに十字架の立っている建物があるだろ。あそこが良い所なんだ、あの教会の窓に止まって休憩しよう。」
　僕は頑張って、なんとか教会までたどり着きました。

大きな窓に止まって、部屋の中をのぞいてみると、たくさんの人が歌を歌っていました。
「僕、この歌初めて聞いたよ。良い歌だね。」
「牧師さんのお話も良いんだ。ほら、耳をすませてごらん。」

「・・・みんなちがう・みんなたいせつ。大きい人もいれば、小さい人もいる。太った人もいれば、細い人もいる。走るのが速い人もいれば、遅い人もいる。みんなちがう。でも、あいつは自分と違うからダメと考えるのではなく、みんなちがう・みんなたいせつなんですよ。」

お父さんは隣でウンウンとうなずいているけど、そんなことが言えるのは、自分に自信があるからだ。僕はそう思いながら、牧師さんを見つめました。

「私は、高校時代胴長短足で、劣等感で悩みました。大人になってからも胴長短足のままですが、今劣等感はありません。神様が私たちひとりひとりを造られて、愛して下さっていることを知ったからです。」

「お父さん、レットウカンって何？」
「劣等感っていうのは、誰かと自分を比べて、『自分は出来損ないだなぁ』って思ってしまうような気持ちのことだよ。」

僕は、一枚だけ短い羽を見つめながら、心の中で何度も何度も繰り返しました。「みんなちがう・みんなたいせつ。」

5. 高価で尊い

「ねぇ、お父さん。僕たちトンボも、たいせつな存在なの？」

「そうさ！秋の夕空にトンボが飛んでいたらどんなに素敵だろうと思って、神様はトンボを造られたんじゃないかな。

　この前も、神様はこの世界すべてのものを造られて、『わたしの目にはあなたは高価で尊い』って言ってくださっているって、牧師さんがみんなにお話していたよ。だから、みんなひとりひとりが、かけがえのない、とってもたいせつな存在として造られているのさ。」

　さっきまで疲れていた僕の体は、新しくなったみたいに軽くなっていました。

6. 愛(あい)されるため生(う)まれた

「お父(とう)さん、実(じつ)は僕(ぼく)、自分(じぶん)のことがあんまり好(す)きじゃなかったんだ。でも、僕(ぼく)のことをたいせつな存在(そんざい)としてつくって、愛(あい)してくださっている神様(かみさま)がいるって知(し)って、とってもうれしいよ！連(つ)れてきてくれてありがとう！」
「そうか、良(よ)かった良(よ)かった。じゃあ、お母(かあ)さんの待(ま)っているお家(うち)に帰(かえ)ろう！」

お父(とう)さんは、僕(ぼく)によりそうように飛(と)んでくれました。

「ねえお父(とう)さん、あの場所(ばしょ)で聞(き)いたお話(はなし)、もっと教(おし)えてよ。」

「そうだなぁ。例えば、何かが他の人より上手だからとか、すごいことができるから、神様は愛してくださるんじゃないんだって言ってたぞぉ。ありのまま、そのままのお父さんたちを、かけがえのない存在として愛してくださって、アイ・ラブ・ユーって言ってくださるんだってさ。」

　僕たちは、さっき教会で覚えた歌を、何度も何度も歌いながら飛びました。
「きみは愛されるため生まれた♫きみの生涯は愛で満ちている♫」(トンボの生涯も愛で満ちている！)

「ねえ、お父さん。あっちを飛んでいるトンボは、僕たちと色が違うね。他にも、違う種類のトンボはいるの？」
「この世界には、なんと約5000種類、日本国内だけでも 200種類くらいのトンボがいるらしいよ。お父さんは、赤トンボ、オニヤンマ・ギンヤンマ・シオカラトンボくらいしか知らんけど。」

「え、そんなに種類が多いなんてすごいね！じゃぁ、僕たちは何トンボの仲間なの？」

「お父さんたちは、ノシメトンボという種類なんだ。『夕焼～け、小焼け～の』って歌にもなっている赤トンボのアキアカネと同じ、アキアカネ属に属しているんだ。だから赤トンボとお父さんたちノシメトンボは、近い親戚ってところかな。」

「へ～、そうなんだ。でも、ノシメトンボって言いにくい呼び方だね。」
「お父さんが小さい頃は、自分たちのことを小豆トンボって呼んでいたんだけどなぁ。小豆トンボも赤トンボも、正式な名前じゃないみたいだな。」
「ふ～ん。とにかく、世界にはいろんな種類のトンボがいるんだね。」

僕はまた、心の中で繰り返しました。
「みんなちがう・みんなたいせつ。」

7. 高(たか)く飛(と)べ

「さあ、今日(きょう)はお母(かあ)さんも一緒(いっしょ)に、ピクニックに出(で)かけるぞぉ。」

「わーい、うれしいな！」

僕(ぼく)は、大喜(おおよろこ)びで飛(と)び上(あ)がりました。

「お母(かあ)さん、ほら僕上手(ぼくじょうず)に飛(と)べるようになったよ。」

「小太郎(こたろう)、すごいね。」

お母(かあ)さんは僕(ぼく)を見(み)て、拍手(はくしゅ)をしてくれました。

「小太郎(こたろう)、空(そら)を飛(と)ぶ時(とき)は、できるだけ高(たか)く飛(と)ぶんですよ。低(ひく)い所(ところ)は危険(きけん)がいっぱいだから・・・」

　その時(とき)です。恐(おそ)ろしい顔(かお)をしたダンプカーの怪物(かいぶつ)が、ものすごい勢(いきお)いで僕(ぼく)に迫(せま)ってきました。

「うわぁ、あぶない！」

僕(ぼく)はすれすれのところで、ダンプカーをよけることができました。

「あ～、びっくりした。あぶなくぶつかるところだったよ。」

「大丈夫(だいじょうぶ)？」

お母(かあ)さんは心配(しんぱい)そうな顔(かお)をして、僕(ぼく)のとなりに来(き)てくれました。

「大丈夫(だいじょうぶ)だよ。」

でも、僕(ぼく)の心臓(しんぞう)はまだドキドキしていました。

8. クイズ

　公園の真ん中にある、一番大きな木の枝に止まると、気持ちの良い風が吹いてきました。
「小太郎。お父さんがクイズを出してあげよう。今、枝にしがみついているお前の足は何本ある？」
「え、６本だよ。そんなの全然クイズじゃないじゃん。」
「じゃぁ、手は何本ある？」
「え！？」
　すると突然、お父さんは僕の頭をコツンと叩きました。
「痛いじゃないか、お父さん！」
僕は両手で頭を押さえました。
「ほら、今頭を押さえた２つの足が小太郎の手だぞ。」

「小太郎、それはお父さんのダジャレだから、学校のテストで『トンボは足が4本、手が2本』と書いてしまったら、たぶんマルはもらえないわよ。」

お母さんは笑いながら、『左手』で僕の頭をなでてくれました。

「それじゃ、今度は僕がクイズを出すよ。トンボには、目がいくつあるでしょうか！」
「そんなの２つに決まってるだろ。」
「お母さんも２つだと思ってたけど、違うの？」

「ブーブー、僕たちトンボの目は1万個から3万個の小さな六角形の『個眼』が集まってできているって、学校の先生が教えてくれたよ。それに上下左右前後、ほとんどすべてが見えていて、後ろだけほんの少し、見えない部分があるんだって。」

「へ～！じゃぁ、お母さんからも問題です。トンボは、どれくらいのスピードで飛べるでしょうか。」
「あそこで自転車をこいでいる人くらい？」
「ブーブー。正解は、時速80kmくらい。人間のあの自動車と同じくらいよ。」
「そんなに？僕たちトンボってすごいんだね。」

「小太郎も、上手に飛べるようになってきたし、勉強も頑張っているし、毎日少しずつ成長していてお母さんうれしいわ。」

僕は『右手』で頭をかきながら、別の枝まで飛びました。お父さんとお母さんがニコニコ見つめてくるので、なんだか照れくさくなってしまったのです。

9. いのちのパン

「お父さん、今日は僕一人であの教会まで散歩に行ってもいいかな？」
「いいよ。だけど気をつけて行くんだよ。」
「は～い、行ってきま～す。」
　僕は少しドキドキしながら、教会まで飛んで行って、また窓に止まりました。
「今日は、どんなお話しをしているのかな？」

「みなさん、おはようございます。今日はいのちのパンについてお話します。」
「いのちのパン？　1口食べれば 1年長生きして、2口だと 2年、3口だと 3年、4口食べると死(４)ぬまで長生きするってことかな。」

「イエス様は言われました。わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は、決して飢えることがありません。」

「へぇ～、そんな便利なすごいパンがあるなら、僕も食べてみたいな。どこで売っているのかなぁ？」

　僕は教会の中に入って、グルグル飛び回りました。するとみんなが、僕を笑顔で見てくれました。僕はクルっと一回転、宙返りをして見せました。すると、小さな男の子がパチパチ拍手をしてくれました。僕は得意になって格好つけながら、外へ出ようとした時に、ゴッツンと頭を窓ガラスにぶつけてしまいました。

「いてぇ！・・・」

あの男の子が僕を見て、ケラケラ笑いました。

「窓ガラスにぶつかったことは、お父さんとお母さんには内緒にしておこうっと。」

10. 魔法の言葉

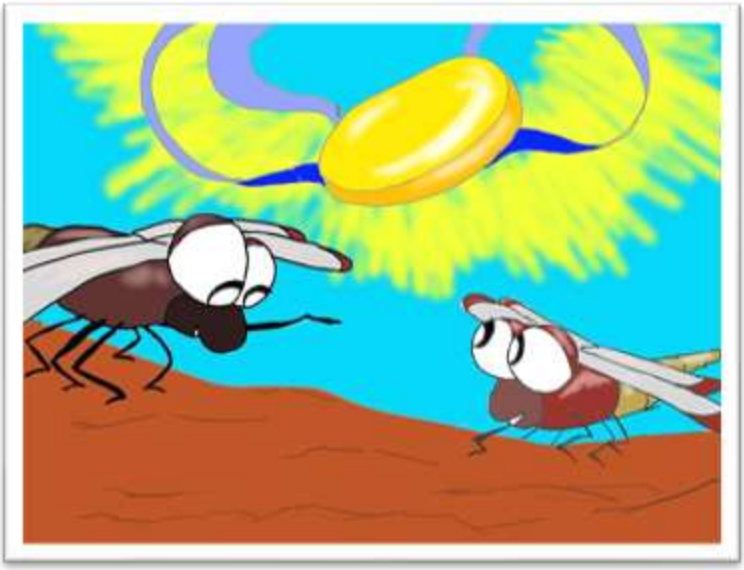
「お母さん、ただいまぁ・・・喉がカラカラだよぉ。」
「はい、お水どうぞ！お散歩はどうだった？」
「ありがとう。楽しかったよ！」
僕は、ゴクゴクと一気にお水を飲みほしました。

「あ！お父さん！僕、宙返りできるようになったんだよ！」
「ほう、すごいな・・・それじゃ今日は、お父さんのとっておきの大事なお話を教えてあげよう。
オリンピックでは金・銀・銅メダルがあるだろう。トンボにも金銀銅メダルのトンボがいるんだよ。
銅メダルのトンボは叱られた時に、言い訳をしないでどう(銅)～んと受け止めて、しっかり相手の言葉を聞くことのできるトンボ。」
「出たぁ、おやじギャグ・・・。」
「銀メダルのトンボは叱られた時に『ごめんなさい』と、すなおに謝ることのできるトンボ。じゃあ、金メダルはどんなトンボだと思う？」

「ん～。悪いことを一つもしないトンボのこと？」

「ブーブー、悪いことを一つもしないトンボはいないよね。金メダルのトンボは、叱られた時に『ありがとう』と言えるトンボだよ。叱られたり、自分の間違いを指摘されたりした時、言い訳をしないで、素直にごめんなさいとあやまって、そして『教えてくれてありがとう』って言えるトンボが、金メダルのトンボなんだ。みんな、幸せだから感謝するんじゃなくて、感謝するから幸せになれるんだぞぉ。」

「ふ～ん、ありがとうは、幸せになる魔法の言葉なんだね。教えてくれてありがとう。お父さん！」



11. 四苦八苦のパン屋さん

　ご飯を食べながら、僕はお母さんに聞きました。
「お母さん、お母さんはなんか面白い話ないの？
布団がふっとんだとか・・・。」
　モグモグしながら、左上をしばらく見ていたお母さんが、笑顔になって話し始めました。
「パン屋のおじさんが言いました。うちの電話番号は４９８９（四苦八苦）で苦労ばかり多くて大変じゃ。
するとパン屋のおばさんが言いました。あら、私は良く焼く（４９８９）パン屋と覚えていたわよ。」
「あはは、おばさんは笑顔でパンを焼いていそうだね。」
「お父さんも、パン屋のおじさんみたいにならないように、気を付けるよ。」
「僕も、どんな時でも悪く考えないようにして、すなおにごめんなさいと謝って、なんでも感謝できる、金メダルのトンボを目指すよ！」

　その日僕は、『いのちのパン』を探しに行って、金メダルをもらう夢を見ました。

12. 一番かなしい日

「小太郎、今日は遠くまで冒険に出かけよう。
お母さんが、お弁当を作ってくれたよ。」
「お母さん、ありがとう！行ってきま～す。」
僕は今まで行ったことのない、初めての場所に行くのでワクワクしました。

　教会を過ぎてしばらく飛ぶと、大きな広場が見えてきました。

「あ！お父さん、あの噴水を見ながらお弁当を食べようよ。」
「よし、そうしよう。お父さんも、さすがに疲れたなぁ。」
お母さんの作ってくれたお弁当には、今日も僕たちの大好物がたくさん入っていました。

「お母さんも、一緒に来れば良かったのに・・・。」
「お母さんはもうすぐ赤ちゃんが生まれるから、無理は出来ないんだよ。」

「え、赤ちゃんが生まれるの？弟かな、妹かな？ねえ、お父さん、いつ頃生まれるの？」
「来年の1月27日くらいかな。」
「楽しみだね、お父さん！」
今日のお弁当は、いつも以上においしく感じて、あっという間にペロッと全部食べてしまいました。

「ねえ、お父さん、競争しよう！」

僕は、障害物競走の様に、たくさんの木の枝の間を、すいすい通り抜けて飛びました。

「お父さん、遅いよぉ！早くおいでよぉ！」

この高さなら、網の付いた長い棒で人間に狙われることもないし、安心して遊べます。次から次へと枝の間をすり抜けていくと、僕のレベルもどんどん上がっていくような気がして、楽しくてたまりません。

「小太郎～・・・！」

お父さんが何か言っているけど、こんなに飛べるようになった僕を見て、きっとほめてくれているに違いない、と思ったその時でした。

「うわぁ、お父さん助けてぇ！」
木の枝と枝の間に張られていた大きなクモの巣に、僕は引っかかってしまったのです。

「お父さん、助けてぇ！」
必死に叫んでも、お父さんの返事はありません。
　すると、大きなお化けのような恐ろしい顔をしたクモが、ニヤニヤしながら僕に近づいてきました。
「お父さん、助けてぇ！クモに食べられちゃう！お父さん、助けて～！」

僕を見つけたお父さんは「小太郎～！」と叫びながら、ものすごいスピードでクモに体当たりしました。何度も何度も、自分よりも大きなクモに、命がけで体当たりしてくれました。

　お父さんは傷だらけになりながら、なんとかクモを追い払って、僕を抱きしめてくれました。でも、僕はお化けグモに体をひどくかじられてしまって、力が入りません。

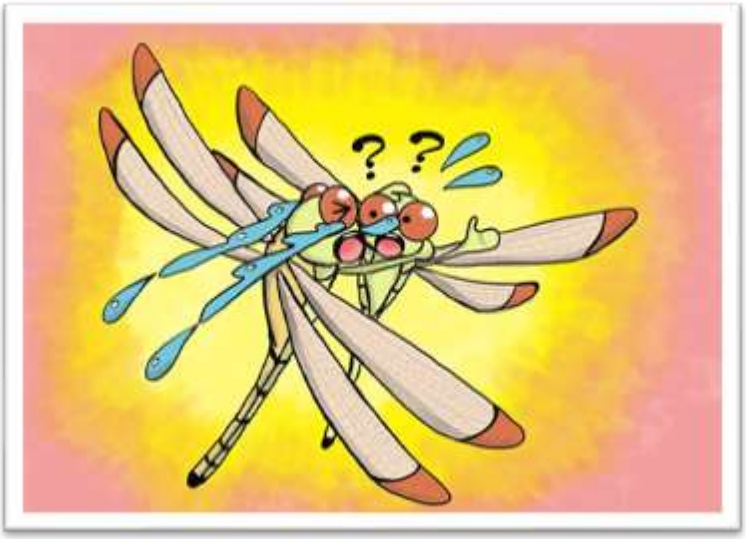
「小太郎、小太郎、大丈夫か!?」
「お、お父さん、助けてくれてありがとう。お父さん、体が痛いよ・・・僕、死んじゃうの？・・・。」

　お父さんは、ただただ「小太郎、小太郎～！」と、大声で泣き叫ぶばかりでした。
「小太郎、小太郎～！」

「まぁ、なんて素敵な夕焼けなんでしょう。こんなにたくさんの赤トンボが飛んでいるところなんて、見たことがないわ。お父さんと小太郎と一緒に見られたら、もっと素敵なのに。早く帰って来ないかしら。遅いわね～・・・。」

「・・・死(し)ぬな、小太郎(こたろう)！小太郎(こたろう)！小太郎(こたろう)～！」

「お父さん・・・。お父さん・・・。お父さん！僕はここにいるよ！どうしたんだよ！涙に鼻水に、よだれまで垂らして。汚いなぁ・・・。」
「あっ、小太郎。おまえ生きていたのか！！」
「朝から何寝ぼけてるんだよ。お父さん。僕は生きてるに決まってるじゃないか。」
「小太郎が生きている、小太郎が生きている！！」



　お父さんが大喜びで僕を抱きしめるので、僕はお父さんの涙と鼻水でぐちゃぐちゃです。
「うわ、ちょっと！汚いじゃないか。」
「良かったぁ、良かったぁ！」
お父さんは、僕をさらに強く抱きしめて叫びました。
「鼻水つけられて、何が良いもんか。」
　僕には訳が分かりません。

お父さんは涙を流してヒックヒック言いながら、僕が死んでしまう夢を見ていたことを教えてくれました。

「今まで、こんなに悲しい気持ちになったことは一度もないよ。小太郎がかわいそうでかわいそうで、代われるものなら代わってやりたいって思ったよ。」

お父さんは夢を見ていたのに、僕のために本当に大声で泣きながら寝言を言って、涙と鼻水を垂らしていたのです。

僕は胸が熱くなって、この間教会で覚えた歌を思い出しました。

『きみは愛されるため生まれた♫きみの生涯は愛で満ちている♫』

「ねえ、お父さん。僕、お父さんと一緒に行ってみたい所があるんだ。」

お父さんは、真剣なまなざしで僕に言いました。

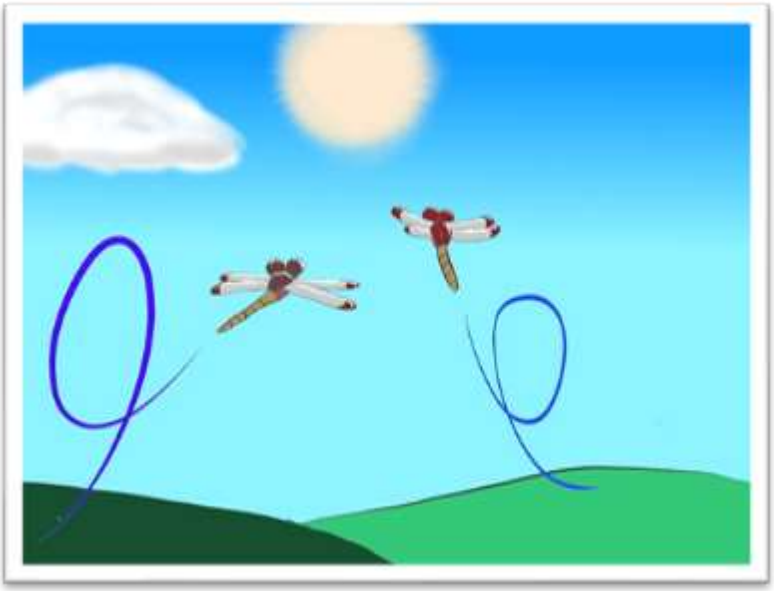
「どこにだって一緒に行ってあげるよ。小太郎、お父さんは何があっても、絶対お前から離れないからな。大切なお前を、絶対守ってあげるからな。」

お弁当を渡しながら、お母さんが言いました。

「ふたりとも、空は高く、前をしっかり見て、気をつけて飛ぶんですよ！」

「は～い！」

僕もお父さんも、一緒に宙返りをしながら答えました。



13. 力水

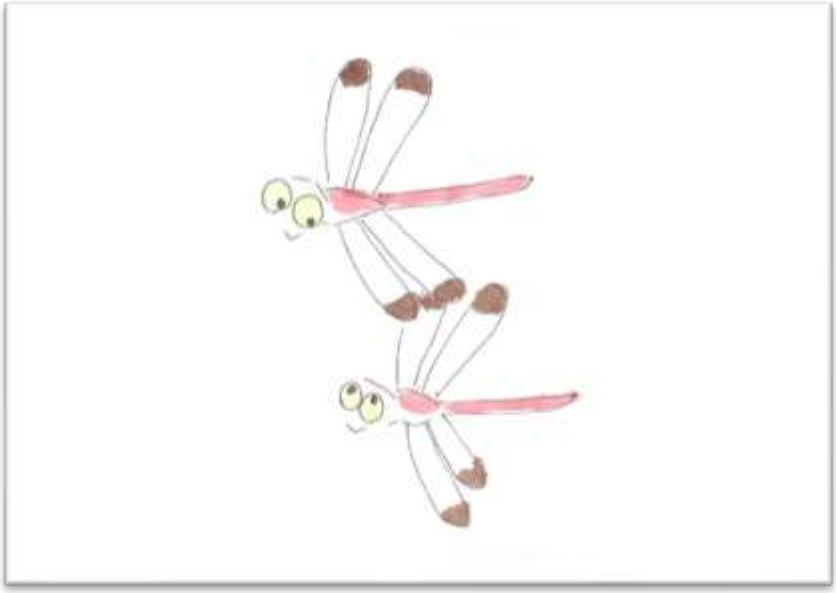
「小太郎、行ってみたい所って、一体どこだい？」
「えっと、話せば長くなるんだけど･･･。僕、この間公園に行った時、手が滑って水筒の水を全部こぼしてしまったんだ。喉がカラカラでどうしようって困っていたら、知らないシオカラトンボのお兄さんが、冷たい水をわけてくれたんだよ！」

「そんなことがあったのか！小太郎は前に、シオカラトンボを見かけた時、少し怖がっていたことがあったけど、大丈夫だったかい？」
「うん。僕たちと違う色のトンボって、なんとなく少し怖いイメージがあったけど、話してみたらとっても優しいお兄さんだった！」

「そうか、良かったね。大切なのは、見た目じゃなくて心なんだ。でも逆に、どんな色のトンボでも、優しそうに見えて実は悪いことをするトンボもいるかもしれないから、気を付けるんだよ。」
「うん、そうだよね。気を付ける！」

「それで、そのお兄さんに会いに行きたいのかい？」
「あ、お兄さんにもまた会いたいけど、その時にお兄さんが教えてくれた、冷たい水をくむことができる場所に行ってみたくて。」

「そうか！それはお父さんも楽しみだ！」
　僕はお父さんと並んで、お兄さんに教えてもらった場所を思い出しながら飛びました。



「あ、見てお父さん！あそこだよ。赤い屋根の上に十字架がある建物が目印だって言ってたんだ。」
「本当だ、ここにも教会があるんだね。あ、ほら。教会の隣で人間たちが湧き水をくんで飲んでいるぞ！きっとあそこだ。よし、お父さん達も飲みに行こう！」

チョロチョロと流れ出る湧き水は、とっても冷たくて、なんだか力が出てくるようなおいしい水でした。
「お父さん、この水のこと『力水』って呼ぼうよ！」
「お、いいねぇ。じゃぁ、お母さんの分もこの力水をくんで、あの教会を少し見にいこう！」
お父さんは、水筒をよく洗って力水をいれました。

「ねぇねぇお父さん、この教会も、前にお父さんと行った別の教会も、なんで屋根や教会の中に十字架があるの？」
「それは、イエス様が十字架で死んでくださったその印なんだよ。十字架はもともと、罪を犯した悪い人を殺す、死刑の道具だったんだ。」

「え、そうなの？イエス様は、どんな悪いことをして殺されてしまったの？」
「イエス様は、神様のひとり子で、悪いことは何もしていない正しいお方だったんだけど、神様を信じないで自分勝手に生きてしまう人たちみんなの罪の身代わりとなって、十字架で死んでくださったんだ。」

14．世の罪を取り除く神の小羊

　教会の屋根の十字架で休みながら、お父さんはイエス様の十字架のことを教えてくれました。
「イエス様が十字架にかけられた日は、過ぎ越しの祭りっていう、年に一度の大切なお祭りの日で、イエス様が亡くなった午後３時は、もともと人間の罪が赦されるための身代わりとして、傷の無い小羊が犠牲となって殺される時間だったんだよ。」
「そうなの！？羊さんもイエス様もかわいそう･･･」

「罪を赦してもらうために、いったい何頭の羊さんが犠牲になったんだろうね？でもイエス様は約2000年前、十字架にかかった時のその時代の人たちのためだけではなくて、今生きている人たち、これから生まれてくる人たち、この世の全ての人たちのことを愛して、みんなの罪を背負って、十字架で死んでくださったんだ。」

「イエス様が完全な身代わりになってくださったから、もう羊さんを犠牲にしなくても良いんだね。」

「そうだよ。例えるなら、みんなが自分では返すことのできない借金を、イエス様がご自分の命と引き換えに全部払い終えてくださったということなんだ。それでイエス様は、亡くなる前に『完了した』と言ったんだよ。全ての人の罪が赦されるために必要な救いのわざは、神様の子羊であるイエス様が完了してくださったから、イエス様を救い主と信じるだけで、神様に罪を赦していただけるんだ。」

　お父さんの話を聞いていたら、教会の中から賛美歌が聞こえてきました。

♫　キリストイエスは～！　ハ～レ～ル～ヤ！

　　よみがえりたもう！　ハ～レ～ル～ヤ！　♫

「お父さん、よみがえったって、どういうこと！？」

15．つくり話のような本当の話

「イエス様は十字架で死なれただけじゃなくて、3日目の日曜日に死から復活してよみがえられたんだよ！あ、牧師先生が何か話してる。聞いてみよう！」

「昔、キリスト教が大っ嫌いなルー・ウォーレスという人がいました。彼は、イエス・キリストが復活したのは嘘の作り話だということを証明するため、『キリスト教撲滅論』という本を書こうと、聖書を調べ始めました。しかし、１章を書きあげて２章に入った時のことです。十字架の上でイエス様が神様に祈った、『父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているのかがわからないのです』という愛の言葉や、イエス様の復活後に命がけでイエス様の十字架と復活を伝道した弟子たちの姿を調べれば調べるほど、これは作り話ではなく、歴史的な事実だと思うようになり、彼自身もイエス様を信じるクリスチャンになったのです。その後彼が書いた小説は『ベン・ハー』という有名な映画にもなりました。･･･」

牧師先生の話に聞き入っていると、教会の壁に十字架とお墓のイラストが映されて、みんながそこに書かれた文字を読む声が聞こえてきました。

「みなさん。イエス様を救い主と信じる人は誰でも、罪が赦されるだけではありません！イエス様がよみがえられたように、イエス様を信じる人もみんな、イエス様と同じ姿によみがえらせていただけるというのが、聖書に書かれてある永遠の命の約束なのです。是非この救いの恵みを受けとりましょう！」

「神様を無視して自分勝手に生きていた罪を赦してくださるだけじゃなくて、永遠の命までくださるなんて、神様はふとっぱらだね！お父さん！」

「お、ふとっぱらなんて言葉よく知っているね。本当に、神様の愛の心は、広くて深くて誰も測ることができないくらい大きいんだ！」

　僕たちは、神様の大きな愛を感じながら、前に違う教会で覚えたあの歌を歌って帰りました。

♫きみは愛されるため生まれた♫
♫きみの生涯は愛で満ちている♫

16．トンボのトンちゃん

　お家まであと少しの所で、誰かがいじめられているのが見えました。

「あ！お父さん、友達のトンちゃんだ！助けて！」

「こらー！何をしているんだー！」
　お父さんは大声で叫びながら、いじめっ子達を追いかけていきました。

「トンちゃん、大丈夫？ほら、涙をふいて。」
「小太郎くん、ありがとう。」
「あ、これ。今日くんできた『力水』！お母さんの分なんだけど、たくさんあるから少しあげるよ。冷たくておいしいよ！ほら、飲んでみて！」

ゴク、ゴク、ゴクと力水を飲んだトンちゃんの顔に、少しだけ笑顔が戻りました。

「はぁ～、おいしい。小太郎くん、ありがとう。」
「うん！」

「･･･小太郎くんは、私の名前、変だと思わない？」
「え、なんで？トンちゃんって、呼びやすいしかわいい名前だと思うけどなぁ。」

「そうかなぁ。さっきみんなに、豚骨のトン子ってバカにされたの。」
「そ、そうだったんだ･･･。それは辛かったね。･･･」

　僕がトンちゃんに何て言おうか考えていると、お父さんが戻ってきました。

「いや～、ごめん！みんなバラバラに逃げられてしまって、あきらめて戻ってきたよ。トンちゃん初めまして。いつも小太郎と仲良くしてくれてありがとう。」

「あ、小太郎くんのお父さん！こちらこそ、あの、助けてくれてありがとうございます。あ、あと、小太郎くんから、力水も飲ませてもらいました！とってもおいしかったです！ごちそうさまでした！」

「ははは、トンちゃんは、しっかりしているねぇ！」

笑って話すお父さんに、トンちゃんは少し驚いたあと照れながら笑い返しました。

「ねぇお父さん、トンちゃんて名前かわいいよね？」
「うん、そうだね。それに、トンちゃんのトンは、『トントン拍子』と同じトンだろ？良い名前だね！」

「え？あの、トントン拍子って何ですか？」
「トントン拍子っていうのは、何か計画をしている事とかが、スムーズに、順調に進んでいくことだよ。」

「わぁ、トンちゃん！良かったね！トントン拍子のトンちゃんなんて、かっこいいよ！」
「うん、ありがとう！もしまた何か悪口を言われても、小太郎くんと小太郎くんのお父さんのことを思い出して、私がんばる。」

「トンちゃん、神様はね、トンボも、豚も、犬も、猫も、人間も、み～んな、一人一人を最高傑作として造ってくださって、『わたしの目にはあなたは高価で尊い』って言って愛してくださっているんだ。だから、できそこないの人なんて誰もいなくて、みんな一人一人が代わりのいない、大切な存在なんだよ。」
「よっ！さすがお父さん！いいこと言うねぇ～」
「ふふふ、小太郎くんったら、まるちゃんみたいなしゃべり方！」
「えへへ。トンちゃんが元気になって良かったよ！」

「ありがとう。小太郎くんのお父さんも、ありがとうございます。でも、みんな大切な存在っていうことは、さっき私に悪口を言ったいじめっ子達も、神様に愛されているっていうことなんですよね･･･」

「うん、そうなんだよ。トンちゃんは、本当にしっかりしているねぇ。トンちゃんをいじめてしまうような弱い心を持っているあのいじめっこ達の罪のためにも、イエス様は十字架にかかって身代わりとなって死んでくださったんだ。もちろん、トンちゃんのためにもね。」

「そうなんですね･･･。頭ではわかっても、心ではなかなか、本当に赦すって難しいです･･･。」

17．福音の汽車

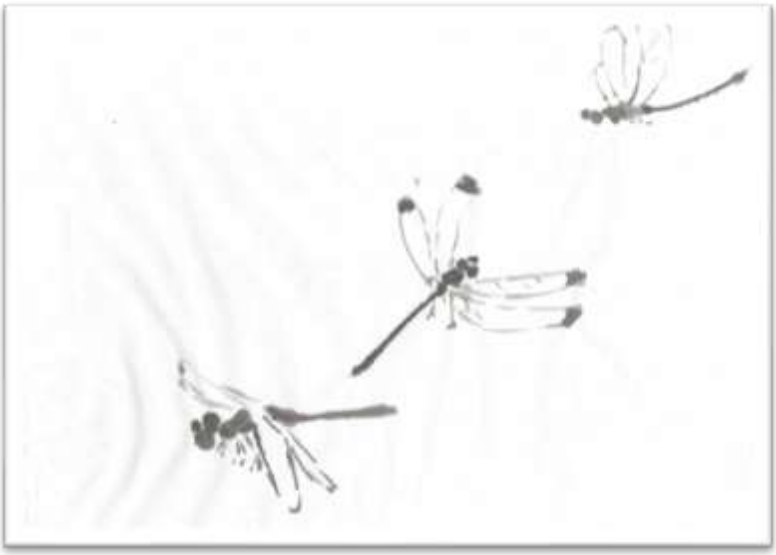
「お父さん、僕も、この短い羽のことをバカにされたり、悪口を言われた時のことを思い出して悲しくなる時があるんだ。どうしたら赦せるのかなぁ。」

「お父さんも、自分の力では難しいことがたくさんあるよ。でもそういう時は、福音の汽車に乗っていることを思い出すんだ。」

「福音の汽車！？」
僕とトンちゃんは、目を合わせて首をかしげました。

すると、お父さんは歌いながら踊り出しました。

♫ 福音の汽車に乗ってる　天国行きに　(ポッポー)
罪の駅から出て　もう戻らない
切符はいらない　主の救いがある
それでただ行く（ポッポー）
福音の汽車に乗ってる　天国行きに ♫



「福音っていうのは、良い知らせ・グッドニュースっていう意味だよ。イエス様を信じるだけで、痛みも悲しみもない天国に行ける列車に、無料で乗せてもらえるんだ！今辛いことがあっても、ハッピーエンドに向かっている途中だから、イエス様の命がけの愛に包まれていることを思い出して、イエス様に助けていただいて、まわりのみんなのことを愛していくんだよ。」

「福音の汽車かぁ･･･。僕も乗りたい！」
「私も･･･、福音の汽車のこと、もっと知りたい！」
「よし、じゃぁ来週の日曜日、一緒に教会に行こう！いろんな 讃美歌や聖書のお話が聞けるよ！」

「はい、よろしくお願いします！それじゃぁ、今日はありがとうございました！小太郎くん、またね！」

トンちゃんは、元気に帰って行きました。

「お父さん、ありがとう！」
「うん、良かったね。あぁ、それと小太郎も、トンちゃんに力水をわけてあげて、えらかったね。」

「えへへ。早く帰って、お母さんにも力水を飲ませてあげよう！」

「そうだね。最近お母さんが腰痛いって言ってたから、お父さんはお母さんの腰を揉んであげようかな」

「じゃぁ僕は、お父さんの肩を叩いてあげるよ」

僕達は、『福音の汽車』を歌いながら帰りました。

♫ 福音の汽車に乗ってる　天国行きに　(ポッポー)
罪の駅から出て　もう戻らない
切符はいらない　主の救いがある
それでただ行く（ポッポー）
福音の汽車に乗ってる　天国行きに ♫

小太郎からみなさんへのプレゼント

福音の汽車にはイエス様を救い主として信じるだけで、だれでも乗せていただけます。

天地万物をつくられた神様が、私たちを愛し、私たちを罪から救うため、約2000年前に人となってこの地上に生まれた神様のひとり子が、イエス・キリストです。私たちの罪の身代わりとなって、十字架で死んで、葬られ、三日目によみがえり、復活したイエス・キリストを私の救い主として信じるだけで、恵みによって罪がゆるされ、神の子とされ、永遠の命が与えられ、神の国(天の御国)に入れていただくことができます。

イエス様を信じたいと思った人は、日付と名前を書いてお祈りしましょう。

天の父なる神様。私の罪のために十字架で
死んで、葬られ、復活したイエス様を、
私の救い主として信じます。
イエス様のお名前によってお祈りします。
アーメン。　　年　　月　　日

名前：

あとがき

　このゴスペルブック(冊子)「トンボの小太郎」の構想・アイディアは、10年以上前に私が実際に「息子が死んでしまう夢」を見て、自分の泣き声で起きた経験から始まりました。

　2019年3月8日、私の兄がガンのために亡くなり、母から電話がかかってきました。「彰が今亡くなった。」涙ながらの電話の向こうで母は言いました。「代わってやれるものなら代わってやりたかった。」

　自分よりも先に息子の死を見届けなければならなかった母の気持ちはどんなに辛かったことでしょう。
その母も同じ年の 12月26日にガンで亡くなりました。

　亡くなった兄と母の記念として、「トンボの小太郎」の話を書きました。どんなに母は、私たち子どもを愛してくれていたことでしょう。
　感謝を込めて「心からありがとう。」

神様によってつくられ、愛されている私たち一人一人は、「みんなちがう、みんなたいせつ」な存在です。

このメッセージをひとりでも多くの人にお伝えすることができればと願っています。

作中で紹介した「君は愛されるため生まれた」の歌は、2009年4月から秋田県の FM ゆーとぴあで放送させていただいている「ゴスペルアワー」というラジオのテーマソングにしています。

https://note.com/goodnewsradio/

原稿・音声

あなたも愛されていることを忘れないでください。

写真：2021年11月 6日

私の指で数分間

羽を休めたトンボ

ゴスペルテックス ／ 羽後町聖書教会　福井　潔

初版 2023年12月

第二版 2024 年 4 月（13 話以降を追加・挿絵差替）